



羽田空港で水際対策の現場を視察する岸田首相（左）  
＝2月12日（代表撮影）

## 岸田首相の「漫然」防止対策

国民の方を向いている？



岸田文雄首相は2月15日の政府・与党連絡会議において、新型コロナウイルススワクチンの3回目接種について接種記録システムへの入力ベースで前日から約110万回増加したと成果を誇った。

第6波の流行がピークアウト

しつとあるとの専門家の意見もある時期に、ようやく達成した目標値だ。もたついた対応は、それまでの経験がまったく生きていないことを露呈している。検査や接種などについて感染拡大への次の備えの時間は十分にあった。しかし、実際には泥縄の新鮮味のない対策にとどまっている。

そんなことにお構いなしに、岸田首相は、金メダルでも取ったような誇らしげな表情で報告していた。それは、政府・与党連絡会議という仲間内の会議だったからかもしれない。

誇るほどの成果であれば、なぜ国会の委員会で、そうでなくとも、お得意のぶら下がり会見で公表しなかったのか。根拠となっている記録システムの公表

値は月曜日が前後に比べて大きくなっているから、接種数の実態より、システムへの入力作業の進捗状況なのだろう。統計の作務的なごまかしが常態化している政府だとはいえ、この数値に作為はないと信じてみたい。

それより問題なのは、1月下旬には40万回をようやく超えた数値がわずか2週間で100万回に達したことだろう。それは政府の取り組みに問題があったことを示す。

3回目接種を2月中旬に100万回まで引き上げると表明したのは衆院予算委員会だった。その結果は委員会に報告すべきことだ。目標達成の報告を国会などで国民に向かって公表するのはなく、内々の会議で済ませ、報道機関を通して間接的に周知するのは、一体どういう理由だろう。加えて、1月4日以来、岸田首相は記者会見を1カ月半以上も開かなかつた。これらの行動は、首相が国民の方を向い

ていないことを示している。

重症化率が低いなどというオミクロン株の特性に安住して、対策にはスピート感がなく、死者数がすでに第5波を超えたことなどへの危機感に乏しい。岸田首相の心配は内閣支持率が低下することであり、それによって与党内で政権批判が高まることなのだろう。

もし、第6波が収束に転じるとしても、それは首相主導の感染対策の効果では全くない。首相が号令をかければ1週間で結果が出たことは、視点を変えれば、これまでできることをやってこなかったことを意味する。漫然とまん延防止等重点措置を続け、海外から「鎖国」と批判されている水際対策の転換も遅れた。緊急事態宣言は念頭にはないと、あらかじめ自ら手足を縛り、「漫然」防止対策をとる岸田首相に、この国の将来を託してよいものだろうか。

（東京大名誉教授 武田 晴人）